



右上腕の筋肉を食い破った錆びた鉄筋の感触が、脈動に合わせて鈍い熱と泥濘んだ痛みを脳髓へ送り込み続けている。

全身に走る無数の裂傷から滲む血は、冷たい雨水に溶けてアスファルトへ流れ落ち、自分の輪郭が水溜まりの中に溶け出していくような悪寒を勇太に抱かせていた。

硝煙と水蒸気が混ざり合う白濁した空間の向こうに、緑のラインが入った黒いジャージの男が歩み寄ってくる… 三下慎平だった。

デジタルワールドから姿を消し、安全な圏外へと去ったはずの彼が、今この絶望的な東京にいる。勇太の擦り切れた神経は、目の前の現実をすぐには情報として処理できなかった。

「…慎平さん…？」

肺の奥に張り付いた血の匂いを吐き出すように、かすれた声が漏れた。

慎平の目は、勇太の姿を雨と自らの血で赤黒く染まり、右腕を力なく垂れ下げた子供の姿を捉えていた。

慎平の唇が微かに歪み、いつもの相手の神経を逆撫するような皮肉の言葉が喉元まで出かかったが、彼はそれを強引に胃の腑へと飲み込み似合いもしない卑屈を隠した笑顔を勇太に向けた。

「…よう来てやったぜ。」

相変わらずボロボロだなおめえは…ま、俺達が来たんだ少くくは…あれだ…まあ大丈夫だ…多分。」

それは、自己評価の低い慎平が、それでも今だけは頼られる側を引き受けようと絞り出した、なんとも不器用な慰めだった。

その言葉が耳を叩いた瞬間、勇太の中で張り詰めていた糸が緩んだ。

膝の関節から急激に力が抜け、鉛のように重い身体が重力に引かれて崩れ落ちそうになる。

慎平が一步踏み出し、痛む右腕に触れないよう不格好に勇太の身体を支えた。

勇太は泣き喚くことも、安堵の言葉を並べることもできなかった。

ただ、冷え切って感覚を失いかけた右手の指先が、慎平の湿ったジャージの布地を無意識に強く握りしめた。

息が一度だけ浅く詰まり、重い瞼が閉じられる。

その微小な反応の重さに、慎平は無言で目を細めた。

背後では、慎平が引き連れてきたジャンクモン達が、迫り来る天使の群れに対して罵声と共に汚物と砲弾の雨を降らせている。ターゲットモンがいつもの軽薄な調子で何かを茶化そうと口を開きかけたが、勇太の傷の深さとその場のただならぬ空気を察し、慌てて口を噤んで周囲の警戒へと戻った。

騒音と火薬の匂いを振り撒くその異端の集団こそが、今の勇太たちにとって唯一の安全圏として機能していた。



割れたガラスが散乱する路面に、すみれが倒れ伏している。
彼女の口元を覆う指の隙間から、粘液質の暗赤色が吐き出され、雨水に溶けて広がっていく。

呼吸は浅く不規則で、パワードスーツに包まれた左脚は神経の伝達を絶たれたように動かない。

その傍らでは、シンドウラモンがハウオウモンへの過度な一時進化の代償によってデータの輪郭を激しく明滅させ、濡れたアスファルトの上で翼を痙攣させていた。

それでもなお「すみれちゃん一人で行かせられへん…。」と、ひび割れた声で身体を起こそうとする。

「おう！終わったぜ慎平！天使共も退いたぜ！動くなら今だぞ！バカ!!!」

慎平の視線が、戦場の状況を計算する。

「…マッハモンに乗って都庁へ突っ込むのは、俺と勇太だけっすね。」

その宣言は、情を挟む余地のない事実だった。

濃霧と瓦礫が塞ぐ都道四三〇号を高速で突破するためには、積載重量は最小限でなければならない。

重傷者を前線へ引きずり回すことは全滅と同義であり、何より天使から離反したばかりの誠司をこの場で監視し、確保し続ける人員が不可欠だった。

決断に反発する声上がる前に、慎平はすみれの瞳を真っ直ぐに見返して言った。「行けないから役に立たないんじゃないっすよ…ここで全員を生かして、戻る場所を残すのも仕事じゃないですかね？」

すみれは自らの肉体が限界を超え、これ以上の同行が勇太たちの生存確率を削るだけの枷になることを、警察官としての理性で理解していた。

彼女は悔しさに唇を噛み切りそうになりながらも、決して無責任な慰めや激励の言葉を選ばなかった。

「…勇太君…無茶だけはしないで…君が光ちゃんを大事のように君を大事に思っているひともいるの…だから危険と判断したら、迷わず逃げること。約束して…」

その言葉は、子供を戦場へ送る大人のせめてもの責任の形だった。

勇太は錆びた痛みが脈打つ右腕を底いながら、かすれた声で短く応じた。

「…分かりました。必ず…約束します。」

少し離れた場所では、誠司が不安そうなエリザモンに向き合っていた。

「…俺が逃げないように見ていてくれ。…その代わり、お前もここにいてくれ。」

「…うん…パ…マスター」

「…好きに呼べ。」

「…!うん!」

天使の軍勢に処分される恐怖に震えていたエリザモンに、篠原は監視役という明確な役割を与えた。

それは、自分を守るために戦ってきたデジモンをこれ以上血塗られた戦場へ巻き込まないための、彼なりの不器用な贖罪だった。



マッハモンのシートに跨がろうとした瞬間、集中と痛みで忘れていた存在に勇太が気付いた。茜たちの姿がない…琴音に分断されたまま、霧の向こう側に置き去りになっている。助けに行かなければならない…勇太がそう思考を駆動させた刹那、新宿の西側、濃霧の深淵に沈む東京都庁の方角から、鼓膜を圧迫するような重く規則的な異音が響き渡った。

遠くのビル群のガラス窓が共振して遅れて震え、路面の水溜まりに幾重もの同心円状の波紋が這い広がる。「…アポカリプスサウンドってやつだな。」

慎平がクロスローダーの画面を見る。デジモンたちの感覚野が、都庁のゲート周辺で発生している致命的な空間位相の変動を捉えていた。何かが通るのか、閉じるのかは分からない。だが、数秒の遅れが不可逆の破滅を招くことだけは明確だった。

直後、隣接する複合ビルの低層階が、内側からの異常な圧力によって弾け飛んだ。破碎されたコンクリートの塊と広告パネル、鋭利なガラスの破片が霰のように降り注ぐ中、恋夜が雨に濡れた路面を滑るように着地した。

それに続くように、茜、エレブモン、レップモン、ディアトリモンが瓦礫の煙の中から転がり出てくる。その後方、暗黒の裂け目から現れたのは、安藤 琴音だった。

「?おへい!!誠司さん何やってんッスカ!捕まったんすか!!?」

「俺はここでリタイアだ。お前も馬鹿やってないで一緒にかないか。あのセクハラ野郎と二人ってお前も嫌だろ。」

セクハラ野郎とは渡辺 直人の事であった。
「え〜!嫌ッスよ!これから茜ちゃんと恋バナするんッス!抜けるならふたりで抜けてくださいよ!」
(…ノリ軽。)

勇太が、若干引きながら誠司と安藤のやり取りを見ていた。その浮ついた、ひどく場違いな声色とは裏腹に、彼女の首元に巻き付いたシェイドモンの漆黒の触手は、獲物の生命を貪るように周囲の影へと浸食していく。さらに琴音のクロスローダーからホーリーエンジェモンとエンジェウーモンが顕現した。

エレブモンは即座に行動を起こした。小さな身体から帯電した粘着性の糸を射出し、濡れた街灯、信号機、放置車両の間に張り巡らせる。単なる電撃の罠ではない。糸の振動と電荷の微小な変化を読み取ることで、霧と影に紛れた敵の死角からの攻撃を先読みとった。

その情報を受信した恋夜が、パワードスーツの磁気ワイヤーで壁面を蹴り上げ、限界トルクを無視した機動で突進する。レップモンの地を這うような斬撃とディアトリモンの喧しい牽制が囷となり、ホーリーエンジェモンの剣圧の軌道を間一髪で逸らした。

「委員長!!」
勇太は右腕の激痛を無視し、マッハモンの車体から身を乗り出して茜の方へと駆け出そうとした。「日野君!」

雨音を切り裂くような、茜の叫び声が響いた。勇太の足が止まる。振り返った茜の姿は、戦士のそれとは程遠かった。雨に濡れて肌に張り付く制服の裾から覗く彼女の膝は、恐怖に小刻みに震えている。顔面は蒼白で、息をするたびに華奢な肩が上下していた。

彼女は怖いのだ…肉体が破壊される恐怖、血を見る恐怖に、今にも泣き出しそうになっている。「こっちは私たちが引き受けん!日野君はへ行って!」

それでも彼女は、勇太へ向けてははっきりと拒絶の言葉を叩きつけた。「でも…「心配だからって相手の決意を蔑ろにするもんじゃねえぞ。」

「でも…!」
「…初対面だけど俺でもわかる…察しってやれ、勇太。」

背後から放たれた慎平の低い声が、勇太の心臓を貫いた。茜の震える心臓の音まで聞こえそうなほどの距離にしながら、勇太は奥歯を噛み砕くほどの力で耐た。マッハモンの排気音が周囲の空気を爆発的に膨張させ、急加速する。

後方へと飛び去っていく景色の中で、茜が一度だけ、震える右手を小さく上げたのが見えた。次の瞬間、ホーリーエンジェモンが振るった聖剣の斬撃が路面を爆砕し、天高く舞い上がった白濁した水飛沫と瓦礫の壁が、勇太と茜の視線を完全に切断した。



白濁した霧と雨のカーテンが、マッハモンのテールランプを完全に呑み込んだ。その残光すら網膜から消え去った直後、アスファルトを叩く雨音を切り裂いて、ひどく浮ついた、場違いなほど甘ったるい声が響いた。

「…ねえ～行かせてよかったんスカ、茜ちゃん？」

瓦礫の山の上にふわりと舞い降りた安藤琴音の言葉には、敵に対する挑発の意図は微塵も含まれていなかった。

ただ純粋な困惑だけがそこにあった…愛する対象を手放すという行為が、安藤には理解できなかったのだ。

自分であれば絶対に影の鎖で縛り付けてでも手元に置くのに、なぜ彼女は自らその手を離れたのか。

(…イライラするッスね…。)

ホーリーエンジェモンの白刃が風を裂き、色井恋夜のパワードスーツの肩口を掠める。

火花と装甲の削りカスが飛散する中、恋夜はディアトリモンの背を飛び越えながら、彼自身も場違いだと自覚している小声で呟いてしまった。

「…アレに賛同するのめどうかと思うけど…本当に、いいのかい、茜ちゃん。」

「今更、聞かァッ！」

すかさずディアトリモンが嘴を打ち鳴らして怒鳴り散らす。極限の死地であって、その一瞬の気の抜けたやり取りは、狂気に染まりかけた戦場にわずかに弛緩させた。

茜は、勇太が消えた西の空をほんの一秒だけ見つめた。

胸の奥底を、挟まれるような剥き出しの寂しさが駆け抜ける。

だが、彼女は濡れた三つ編みを乱暴に振り払い、両足でしっかりとアスファルトを踏み締めた。

「よかとです。…これで、いいんです…！」

感情の閾値を超えた証である言葉が、雨水に濡れた唇からこぼれ落ちる。

「茜がそう決めたなら、ワタシもいいよ…ちょっと寂しいけどね。」

エレプモンの軽快な声が足元から響く。

それは無責任な傍観者の言葉ではない。

強がりだけで立っている十二歳の少女の震える膝を、誰よりも近くで理解しながら、それでも問い詰めずに寄り添うという、エレプモンなりの愛情の形だった。

感傷に浸る時間は一秒も与えられずエンジェウーモンの放った不可視の光矢が、映画館の白い外壁を無慈悲に抉り取る。巨大な金属製の看板が固定具を引きちぎられ、重力に従って落下してくる。

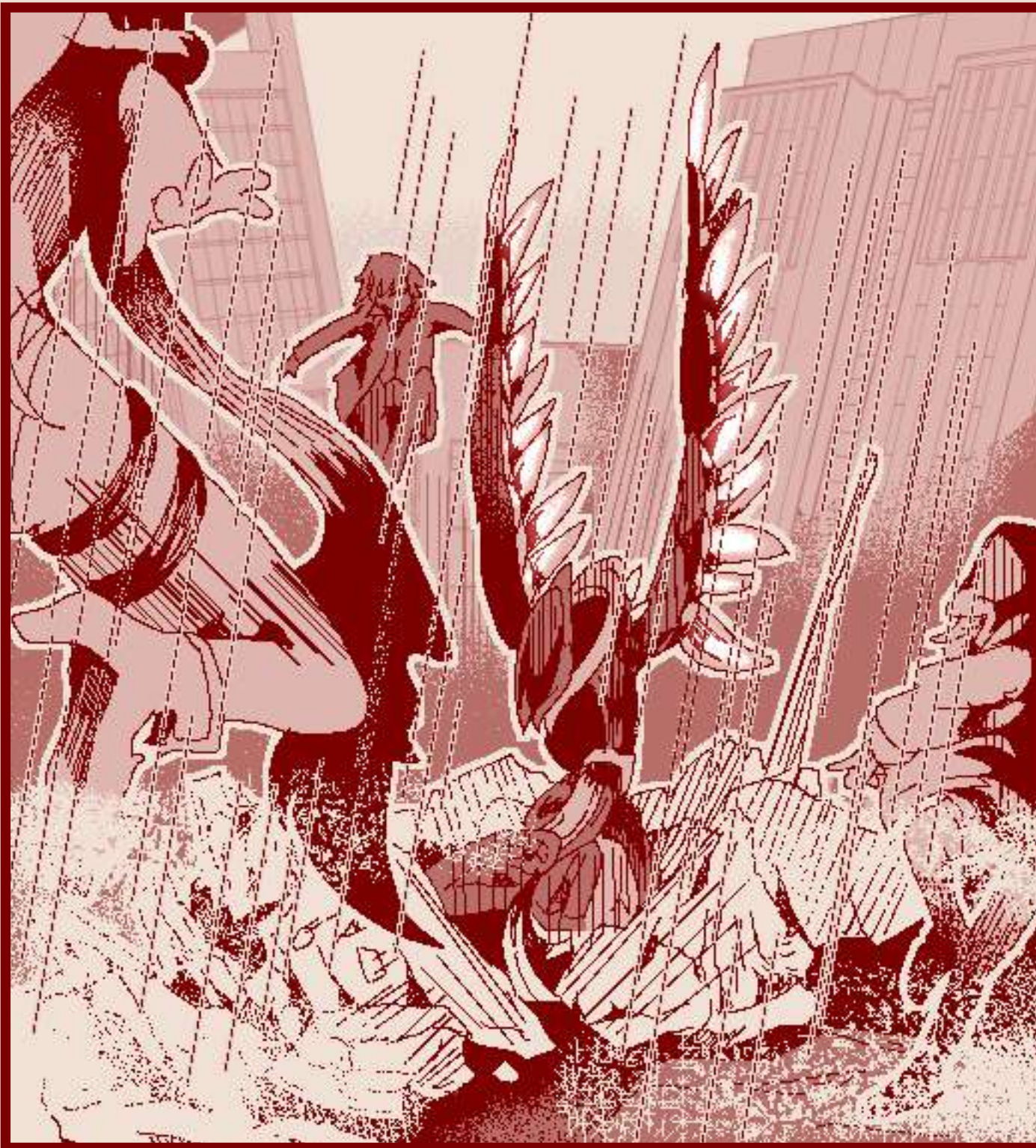
「エレプモン！」

「任せな！」

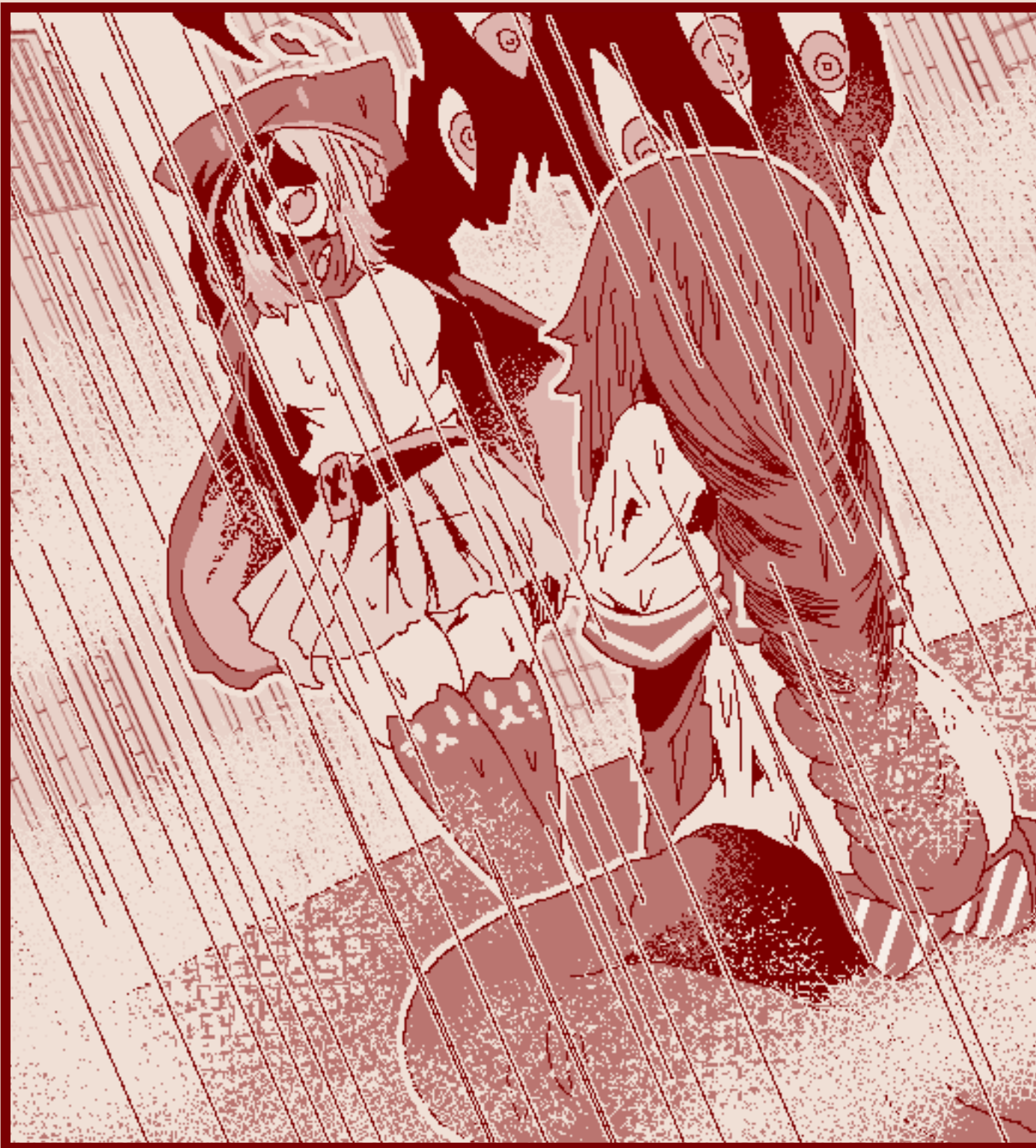
茜の指示より早く、エレプモンの体毛から電気を帯びた粘着糸ネバネバネットが網目状に射出され、落下する数十トンの質量を空中で斜めに受け止める。恋夜がスーツの強化脚力で網の支点を強引に蹴り上げ、軌道を無人の車道側へと逸らした。

轟音と共に看板がアスファルトを粉碎する。

茜は周囲に避難者がいないことを瞬時に目視確認すると、垂れ下がったままの送電線へ向けてエレプモンに新たな糸を繋ぐよう指示を飛ばした。



エレモンは成長期という脆弱なスペックを、その汎用性で補っていた。
射出されるビリビリネットは、敵の身体を物理的に拘束するのではなく、網膜や運動神経へ微小な電流ノイズを流し込み、踏み込みのタイミングを意図的にコマ数秒だけ狂わせる。
さらにエレキネットを濡れた路面に直接敷設することは避け、ガードレールや放置車両の金属フレームへと電荷を分散・誘導し、味方である恋夜たちが感電しないための安全な導線（アース）を構築し続けている。
同時に、極細の感覚系を雨と霧の中に無数に張り巡らせていた。
水滴の振動と空気の静電容量の変化を読み取ることで、視界外に潜む敵の配置や、シェイドモンが地を這わせて伸ばしてくる操作線の軌道を完全に探知している。
信号機や破損した街頭モニターへ直接ハッキングを仕掛け、点滅の周期を狂わせて一瞬の目眩ましを作り出し、恋夜が踏み込むためのデッドスペースを絶え間なく供給し続けていた。
崩落の危険性があるビル風の向き、恋夜の呼吸の乱れ、シェイドモンの影が収束する気配。
レップモンが無言のまま低い姿勢でホーリーエンジェモンの膝裏の死角へ斬撃を放ち、ディアトリモンが鼓膜を破るような喧声でエンジェウーモンの注意を上空へと引きつける。
攻防の中、恋夜は必要な一瞬だけ二体をピーコックモンへとジョグレス進化させ、圧倒的な防御の壁をこじ開けると、デジコアの消耗を避けるために即座に進化を解除して回復へ回すという綱渡りの指揮を行っていく。
恋夜の視界の端で、指示を出し続ける茜の姿が映る。
彼女の背筋は真っ直ぐに伸び、声には張りがある。
だが、雨に濡れた指先と、スカートから覗く両膝は、痙攣するように小刻みに震え続けていた。
エレモンが殺傷力のある攻撃を極端に避けている…というよりも出来ない理由を、恋夜は痛いほどに理解した。
デジモンはタイマーと鏡映し…普段の強気な姿とは違い本質では、茜は勇敢などではない。
切り裂かれる肉、飛散する血、蹂躞される生命といった戦闘の現実に対する根源的な恐怖に、今にも押し潰されそうになっている等身大の子供なのだ。
それでも彼女は、勇太の道を塞がないため、自らの意志でこの死地へ残ることを選んだ。
（…格好いいじゃねえか…茜ちゃん!）
恋夜は内心でその勇気を称賛し、弱い者を守るための盾とした。
恐怖を知らない者を守るのではない…恐怖に泣き叫びたい本音を殺して、それでも足を踏みとどまっている少女を、絶対に一人にはさせない。
だが、琴音はその人間性の連帯を、無機質な物量の暴力で蹂躞しにかかった。
「邪魔ッスよ」
琴音のクロスローダーから、黒々としたデータの奔流が溢れ出す。
アンドロモン、無数の触手で広域を制圧するブロッサモン、そして空対地爆撃を担うメガドラモン。
役割の異なる三体の完全体デジモンが、雨の新宿へ召喚された。
シェイドモンの触手が鞭のように伸び、召喚された完全体たちの首筋や背面の装甲の隙間へと、寄生虫のように深々と食い込んでいく。
意志を持たない傀儡と化した完全体たちは、巨体を軋ませながら、琴音の手足の延長としてのみ駆動し始める。自律的な判断力を持たないため、行動の起点にはコマ数秒の不自然な遅延が生じる。
だが、琴音はその弱点を、圧倒的な射程と暴力の数で塗りつぶした。空からの絨毯爆撃、地を這う茨の拘束、そして死角からの鋼鉄の打撃。戦場のすべての空間が殺意で埋め尽くされ、恋夜たちの退路は秒単位で削り取られていった。



戦闘の天秤が、不可逆の角度で傾いた。

恋夜がパワードスーツのブースターを全開にし、シェイドモンの本体と琴音を繋ぐ操作線の結節点まであと一歩の距離に迫った、まさにその瞬間だった。

琴音の瞳から光が消え、複数の完全体へ向けた同時攻撃の意志が伝達される。アスファルトを突き破って隆起したブロッサモンの巨大な茨の蔓が、逃げ道を失ったレッパモンとディアトリモンの四肢を蛇のように絡め取り、アスファルトへ縫い付けた。同時に、メガドラモンの両腕から放たれた高密度のミサイル群が、恋夜の周囲の空間ごと挟り取るように着弾する。

逃げ場はない。さらにその爆煙の死角から、エンジェウーモンの不可視の光矢が、恋夜の心臓という一点へと完璧なタイミングで交差した。

「しまっー！」

恋夜は自らの回避を完全に放棄した。パワードスーツのジェネレーターを強制的にオーバーロードさせ、前面の電磁装甲の出力を最大化する。

両腕を交差させ、拘束された二体のパートナーをその身一つで庇い込むように覆い被さった…直撃。

人間の肉体が耐え得る限界を遥かに超えた衝撃波が、雨と霧の空間を球状に吹き飛ばした。

恋夜の身体は、ラグドールのように車道の上をバウンドしながら吹き飛ばされ、数十メートル先の映画館の白い外壁へと激突した。コンクリートの壁面に深い亀裂が走り、パワードスーツの強靱な装甲が悲鳴を上げて碎け散る。

恋夜は壁から崩れ落ち、ビクリとも動かなくなった。

茨から解放されたものの、レッパモンは後ろ脚の骨格データを碎かれて無惨に引きずり、ディアトリモンはひび割れた嘴をアスファルトに何度も打ち付けながら、それでも立ち上がろうと身悶えている。

世界から、雨音以外のすべての音が消失したように茜には感じられた。

恋夜の碎けたバイザーの隙間から、雨水で薄められた桜色の液体が、とめどなく路面へ流れ出している。それはゲームのエフェクトでも、映画の演出でもない。

人間の体温、命の源である血液の生々しい色彩だった。

(…はあっ…はあはあ。)

茜の気管が急激に収縮し、酸素の供給を拒絶した。過呼吸。足の裏から全身の血が引いていくような悪寒。自分が思い描いていた「戦い」という概念の薄っぺらさが、圧倒的な死の現実を前にして粉々に碎け散る。

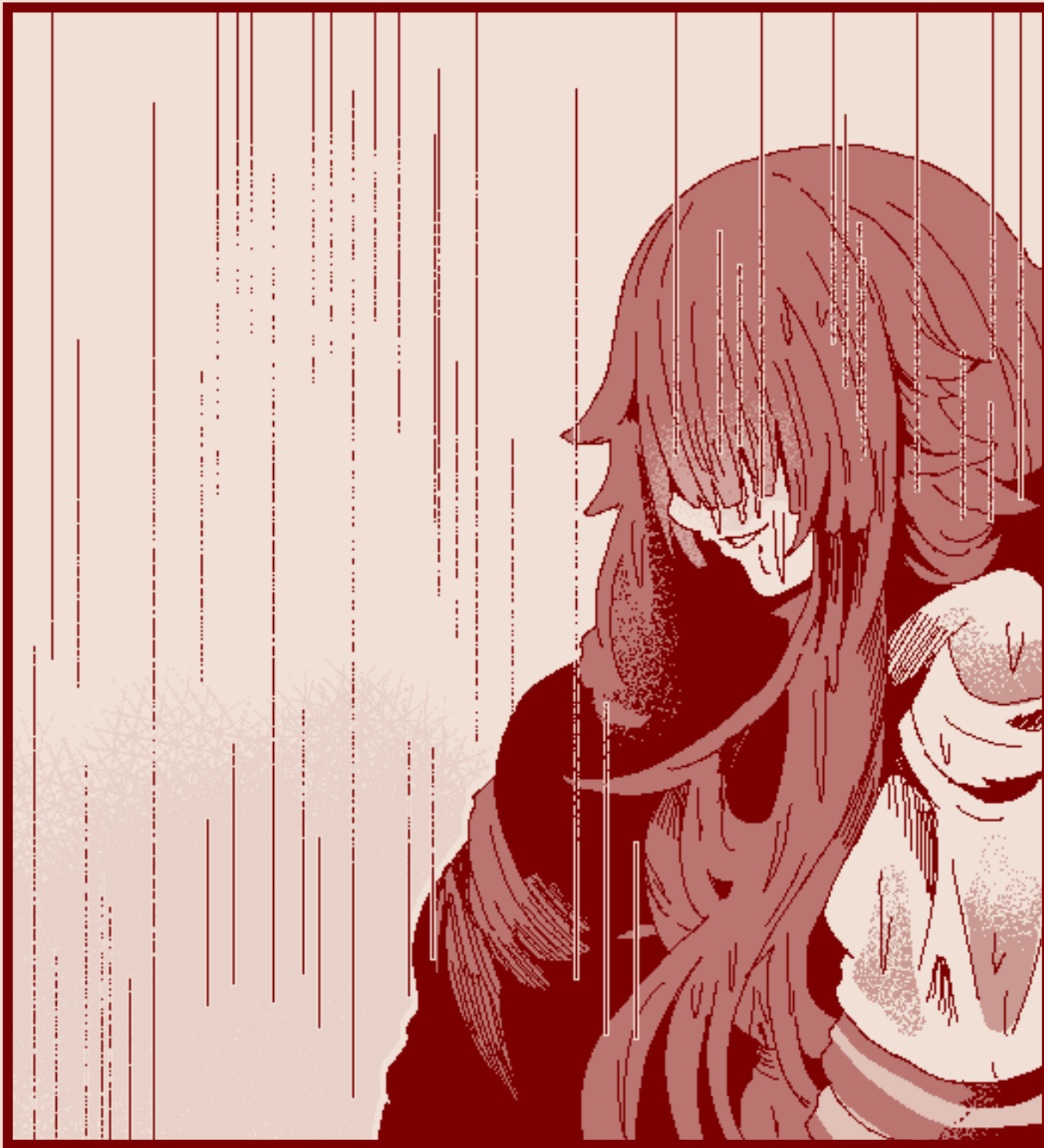
(殺し合い…。)

両膝から力が抜け、茜は污水に塗れたアスファルトにへたり込んだ。

指示を出すどころか、喉の奥で引き攣ったような嗚咽を漏らすことしかできない。左腕のバイタルプレスが、異常な心拍数の急上昇を感知し、赤色の警告ランプと電子音を狂ったように鳴らし続けている。



瓦礫の粉塵を踏みしめながら、琴音がゆっくりと歩み寄ってきた。
 壁際でピクリとも動かない恋夜を一瞥し、まるで邪魔なゴミが片付いたとでも言わんばかりの、ひどく冷たく、そして安堵の入り混じった視線を向ける。
 「や〜と、二人きりになれたッスね…茜ちゃん」
 その顔に張り付いた浮ついた笑顔は状況にそぐわない軽薄なものが茜の恐怖心を煽った。
 「無視すんじゃないわよ！茜には、触らせないよ！」
 エレプモンが細い四肢でアスファルトを蹴り、琴音の喉元へ向けて決死の跳躍を見せる。
 だが、琴音の背後から蛇のように蠢き出たシェイドモンの漆黒の触手が、ハエでも叩き落とすような無造作な軌道で薙ぎ払った。
 「きゃあっ！」
 空中で完全に姿勢を崩されたエレプモンは、閉まったままの店舗のシャッターへと叩きつけられ、ひしゃげた金属音と共に路上へ転がった。
 データとなって消滅こそしなかったものの、細い脚は痙攣し、すぐには立ち上がれない。
 「エレプモン…ッ！」
 茜が這うように手を伸ばそうとした瞬間、琴音の細く冷たい指が、茜の震える手首を強引に掴み取った。
 万力のような力だった。琴音は茜の顔を覗き込み、息継ぎすら忘れたような早口でまくし立て始めた。
 「なんで勇太君を行かせたンスか？好きなら、一番危ない時こそ一緒にいたいはずじゃないスカ。」
 聞いたッスよ日野さん鬼塚 光って雌のところへ行かせたら、茜ちゃんのひとりぼっちになっちゃうッスよ？」
 琴音の眼には、狂信的な光が宿し口元と反して笑っていなかった。
 「今から追いかければ間に合うッス。」
 シェイちゃんの力があれば、勇太君の頭の中から、鬼塚 光も全部綺麗に消してあげられるッス。
 茜ちゃんのことだけをだ〜い好きにさせてあげるッスよ。
 そうすれば、勇太さんも茜ちゃんも誰も傷つかない…二人の幸せな世界が完成するッスよ！」
 恐怖と欲望が合わさり…揺れる…それは、毒のある誘惑だった。
 目の前の地獄から逃げ、楽園を作る。
 琴音は悪意で語っているのではない。彼女自身が太田 勇斗にした事を茜にも善意で手を伸ばしている。
 茜は、呼吸の仕方を忘れたように口を半開きにしながら、琴音の瞳の奥に広がる底なしの暗闇を見つめ返した。
 そして。
 ガタガタと笑う膝に無理やり力を含め、泥水に塗れたスカートを握りしめながら、茜はゆっくりと、だが明確な意志を持って立ち上がった。
 拘束されていた手首を、渾身の力で振りほどく。
 茜はそのまま一歩前に出た。
 倒れて動けないエレプモンを背に庇い、暴力の権化である琴音と究極体たちの前に、その小さな身体を真っ直ぐに晒した。
 振りほどかれた右手を見つめたまま、琴音の顔から、あの不気味な浮ついた笑顔が完全に剥がれ落ちた。
 能面のような、一切の感情が抜け落ちた真顔。
 「…なんで？」
 琴音の唇から漏れたその一言は、単なる疑問ではない。
 善意を踏みにじられた事ではなく、自分という人間の生き方、愛し方、魂の根源に至るまでを、完全に否定し拒絶された者の、実存を揺るがすものであった。



雨音がアスファルトを叩くノイズの中で、彼女の瞳孔が小刻みに震えている。安藤にとって、茜が自分と同じ選択…好きな相手の心を奪ってでも所有する…をしてくれないことは、単なる意見の相違ではなかった。

それは、安藤自身の生き方、他者を支配することでしか得られなかった歪な愛情の形、そして孤独な魂のすべてを、真正面から間違っていると否定されることと同義だったのだ。

「なんで…なんでなんスカ？ 勇太君のことが、好きじゃないんスカ？」

琴音は、泥水に濡れたアスファルトを一步踏み出し、理解不能な異星人を見るような目で茜を問い詰めた。

「好きなのに、誰かに取られるのが怖くないわけじゃないんスカ？」

「だったら、他人の気持ちなんてどうでもいいじゃないッスカ？ 自分のものにすればよかったんじゃないスカ？ 無理やりにも選ばせればいいそうじゃないと…おかしいッスカよ!!!」

茜は、震える膝に力を込めながら、琴音の狂気じみた眼差しを受け止めた。

一瞬だけ、茜の脳裏に甘い幻影がよぎった。

勇太が光の記憶をすべて失い、毎朝自分だけを見つめてくれる世界。自分の言葉にだけ必ず頷き、自分の望んだ通りにだけ笑いかけてくれる勇太。

けれど。

その想像の中にいる勇太の瞳からは、彼が悩み、迷い、間違えることを恐れながらも、誰かのために必死で考えようとする、あの眩しい光が完全に抜け落ちていた。それは勇太の形をした、ただの空虚な人形だ。

「それで…」

茜の口から、冷たい雨水に溶けるような細い声が漏れた。琴音を論破するためではない。自分自身の内側に巣食う醜い嫉妬の泥へ向けた、確認の言葉だった。

「それで…私は、本当に幸せになれると？」

その問いは、琴音の耳膜を鋭利な氷の針のように貫いた。

琴音の脳髓の奥底に封印されていた、どうも黒い記憶の蓋が弾け飛ぶ。

引き籠もっていた薄暗い部屋。扉越しに何度も声をかけ、外へ出る勇気をくれるまで待っていてくれた時の、勇斗の不器用だが温かい笑顔。

シェイドモンで彼の精神を支配した直後。「琴音のことが好きと言って」と頼んだ瞬間、影の触手が首を絞め上げ、勇斗が一拍遅れて機械のように「好きだ」と繰り返した、あの底冷えのする光景。

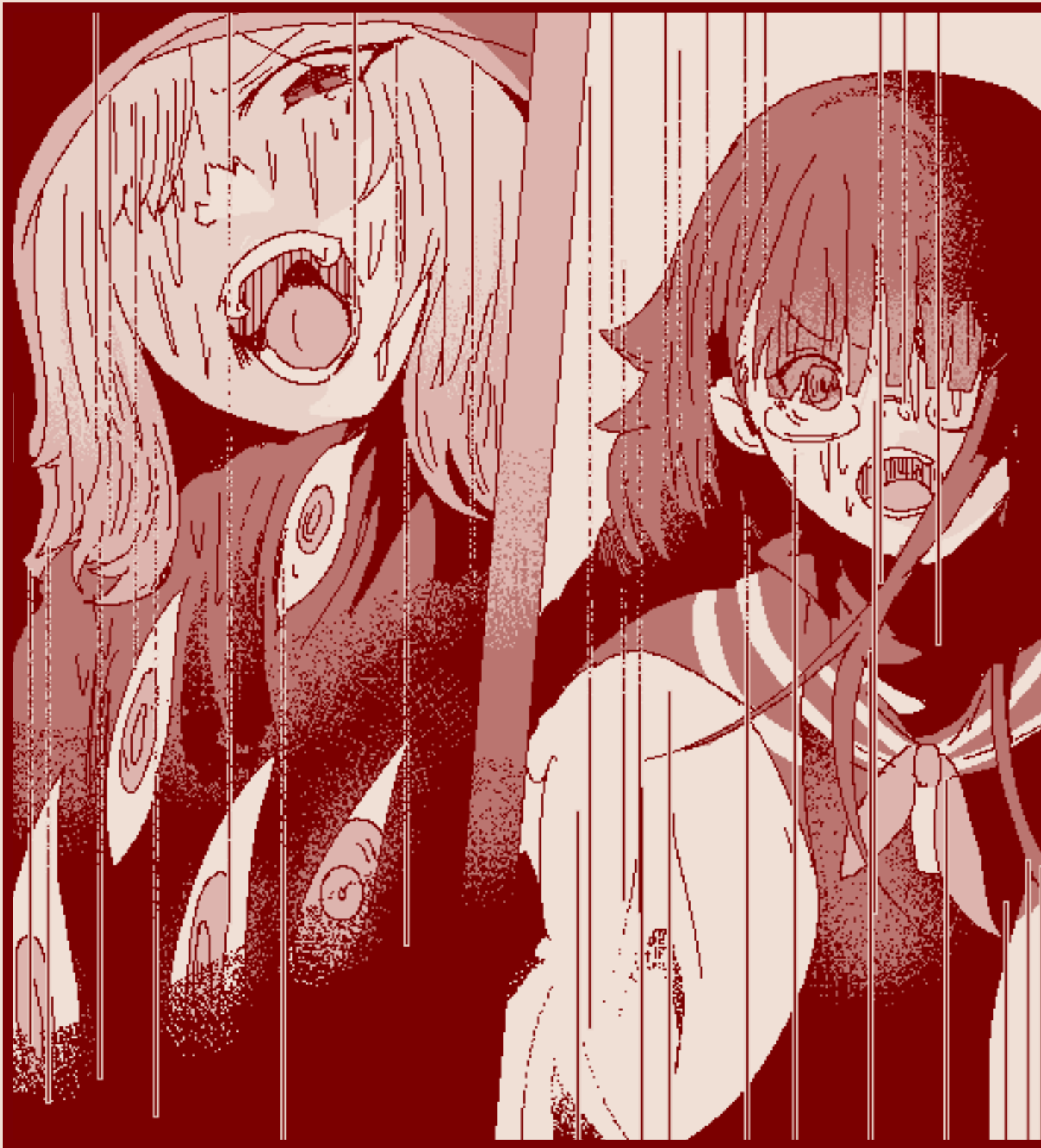
琴音が不安で泣き叫んだ時。命じれば彼の腕は動いて涙を拭ってくれるのに、勇斗の口から自発的に「琴音」と名前を呼んでくれることは、二度となかった。

そして、一度だけシェイドモンの力が弱まった瞬間。勇斗が琴音へ駆け寄るのではなく、怯えたように半歩、後ろへ退いたあの動作。

琴音は、それらを疲労のせいだ、薬のせいだ、この理不尽な世界のせいだと、自分自身に嘘をつき続けてきた。

「なれたよ!!!!!!だって…!だって琴音は!!!!!!」

…だが本当は、知っていたのだ。今自分の隣に立っている勇斗は、ただの一度も、自分自身の意志で琴音を選んでなどいないということ。



「さい……うるさい、うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!うるさいッ!!」

目を背けてきた真実を、琴音は暴力的な怒りで押し返した。彼女の顔面から血の気が引き、血管が青く浮き上がる。

「琴音が幸せならそれでいい！他人なんて、どうせ琴音を裏切って傷つけるだけなんだから！自分の幸せを一番にして何が悪いんスカ！あんたも、琴音と同じように真っ黒なくせに!!!何綺麗ぶってるの!!!」

あるいは完全に崩れ落ちる。浮ついた仮面が砕け散り、その奥から、愛される価値がないと怯え狂う幼児のような醜い素顔が露出した。

琴音が、鋭い爪を立てた手を茜の眼球めがけて伸ばした、その瞬間だった。
「茜には!!!指一本触れさせないよ!」

倒れていたエレプモンが、小さな羊の身体を弾丸のようにして琴音の腹部へ体当たりを敢行した。必殺技でも何でもない、ただ身を挺しただけの泥臭い突撃。

濡れた路面に足を取られ、琴音は無様にすっ転んだ。慌ててシェイドモンの影が彼女の背中を受け止める。

茜の左腕で、バイタルブレスがけたたましい警告音と共に明滅していた。

心拍数は危険域…極限の恐怖で血流が乱れ、指先は氷のように冷たい。

だが、デバイスのセンサーが読み取っているのは、恐怖が消え去った精神ではない。

圧倒的な死の恐怖の只中にありながら、それでも逃げ出さず、倒れたエレプモンの方へ手を伸ばそうとする。

茜は、泥だらけの路面を踏み締め、琴音を見下ろして叫んだ。

「…しも」

「?」

「ウチだって日野くんに好きになってほしいっちゃん!鬼塚さんが羨ましくてたまらん!正直、ウチのほうが日野くんに対応しいって本気で思っとるし!ずっとなんで鬼塚さんなん?なんでうちじゃないと?って思っとる!」

博多弁のアクセントが混じるその声には、自分自身の醜さを一切隠さない強さがあった。
「それでも…!それでもっ!!うちが好きなんは…誰かのこと放っとけんで、真っ直ぐで、お人好しで…鬼塚さんのことが好きな…そんな、今のまんまの日野くんなんよ!!」

やけん…やけん、誰のもんでもよか!うちが好きな日野くんのままでおってもらうために…ここだけは、ウチが絶対通さんけん!!」

「ウチ?…ワタシ達でしょ?茜?」

「エレプモン!!!」



硝煙と雨粒が交錯する薄暗い新宿の街路に、目に見えない境界線が引かれていた。斜めに空間を両断するその境界の上段には、泥水と血に汚れ、羊毛を逆立たせたエレプモンの顔がある。

細い四肢の奥には打撲の熱と恐怖の震えが残存しているが、その金色の瞳だけは一切の逃避を拒絶していた。

普段の軽口の裏側に隠されていた、相棒を絶対に独りにはさせないという静謐な決意。その網膜の表面に、赤い心電図の波形と微細な回路の明滅が薄膜のように反射している。

そして境界の下段には、雨粒に濡れた眼鏡のレンズ越しに、一切の退路を断った茜の瞳があった。

バイタルブレスの朱い警告光がレンズの端で狂ったように瞬いている。

唇は一文字に結ばれているが、華奢な顎のラインと肩の震えは、彼女が死の恐怖を完全に克服したわけではない事実を証明していた。

骨の髄まで恐怖に凍えながら、それでも退くことを拒絶しただけの、ただの十二歳の少女だった。

別々の高さ、別々の次元にあった二つの視線が、空間の消失点へと収束していく。離れた場所に立ちながら、二人は完全に同じ一つの未来を睨み据えていた。

破壊された新宿のコンクリートやひしゃげた信号機、雨に濡れたショーウィンドウの輪郭が、赤黒いノイズに侵食され、半透明のデジタルフィールドの基盤へと置換されていく。物理的な風景と、無機質な電子回路、そして二人の生命の律動を示す波形が、一つの空間に多重露光のように重なり合った。

茜の極限状態の速い呼吸と、エレプモンの微弱な心音。別々の周期で脈打っていた二本の赤い波形が、空間の境界線で接触し、やがて一つの巨大な脈動へと同期を果たす。

その完璧な一拍の律動に呼応し、エレプモンの毛先と茜の赤紫の三つ編み、そして空を落ちる雨粒の群れが、重力を失ったようにふわりと中空へ浮き上がった。

爆炎と破壊のノイズが急激に遠退き、絶対的な真空のような静寂の中で、二つの心臓が同期する音だけが世界を支配する。

「だから茜！一緒に！止めるわよ！」

「もちろんたい！」

二つの魂が同時に叫び終えた直後、両者を隔てていた空間の境界線そのものが、網膜を焼くような純白の光を放って弾け飛んだ。



茜の左腕が、鉛のように重い大気を切り裂いて天へと掲げられる。

指先は空を掴むように真っ直ぐに伸ばされているが、筋肉の疲労と極限の恐怖によって、その指の腹は痙攣するように小刻みに震え続けていた。

腕に装着されたバイタルブレスの液晶ゲージが、安全領域の閾値を食い破る。

表示枠という物理的な限界から溢れ出した白熱の光は、単一の光線ではなく、何本もの高密度の帯となって茜の細い手首から肘、そして肩へと螺旋状に巻き上がっていった。

光の帯の表面には、致死的な心拍数、血流の加速度、そしてエレプモンとの完全なる同期率を示す細かな電子記号が、滝のような速度で流れ続けている。

彼女の背後の虚空に、円環に囲まれた人型のシンボルが展開された。それは単なる装飾ではない。

人間の生命活動がデジタルワールドの進化機構にアクセスを許可されたことを示すものであった。

その人型の円環の外殻を這うように、羊の角と回路を抽象化したエレプモンの固有紋様が噛み合い、二者間の波長が承認される。

光源の中心は絶対零度の白、その縁を朱赤が縁取り、さらに最外殻をエレプモンの属性を反映した赤紫の電離プラズマが覆っている。

光の帯から枝分かれした細い放電とデータ繊維の糸が、茜の皮膚を傷つけることなく空へ伸び、眼前の小さな羊へ向けて眩い情報の橋を架けた。

朱い光に照らし出された茜の横顔。気管は痙攣し、呼吸は泥を吸るように苦しい。膝は今にも折れそうに震えている。

バイタルブレスの警告音が、彼女の心臓が未だ危険域の極地にあることをに告げている。

冷静沈着な指揮官になったから進化の奇跡を引き当てたのではない。

恐怖の泥濘に沈んだまま、それでも相棒の命を繋ぐために腕を下ろさなかった、その無謀な意志だけが進化の炉心に火を点けたのだ。

心臓が肋骨を内側から叩き割るような巨大な一拍に続き、電子の起動音が低周波のうねりから可聴域を引き裂く高音へと一気に駆け上がる。

光の帯が完全な回路を形成したその一瞬、世界の雨音が完全に遮断され、澄み切った二つの声だけが戦場を貫いた。

「エレプモン、進化!!」

絶叫と共に茜の腕から放たれた光の奔流が、空間を跳躍してエレプモンの身体へと直撃した。



光の直撃を受けたエレプモンの肉体が、絶対的な白光を放つ巨大な繭へと変貌する。その球体の中心には、垂れた耳と柔らかな羊毛、細い四肢を持つ成長期のシルエットが、辛うじて輪郭を留めていた。周囲の空間には、大小の二重螺旋構造、縦に流れる二進数の鎖、回路の断片、そして微細な四角形のデータ粒子が衛星のように周回し始める。

分解が始まり泥と雨水に汚れた羊毛の先端が、微細な光の粒子へと解け、中心の核へと吸い戻されていく。それに続いて耳が、尾が、細い脚の外縁が、流麗なデータ列へと変質し、繭の深淵へと還っていく。それは肉体を破壊する凄惨な苦痛ではなく、旧い器の輪郭が次代の生命の設計情報へと美しく翻訳されていく、冷徹な再構築していく。

エレプモンの金色の瞳だけは、情報の濁流の中で最後まで形を保っていた。その眼差しは、自分を信じて腕を掲げる茜の姿を真っ直ぐに網膜へ焼き付けた後、二つの光点となって純白の球体へと溶け落ちた。

光球の内側で、生命の灯火のように新たな骨格の設計図が明滅する。

四足歩行の獣の強靱な骨組み。その太い線が一つ、また一つと点灯していく。小さな羊の身体を内側から食い破るように、成熟期の雄々しく巨大な輪郭が二重写しになって膨張を始めた。その胸の奥深くに、後に恐怖の震源となる金属質のデータ核が形成され、冷たい輝きを放ち始める。

空間を舞う DNA 状の螺旋が赤い心電図の波形と、青白い電子回路の鎖が撚り合わさり、茜の精神とデジモンのデータが結合したものだった。

外周を真紅が覆い、さらに外側を暗い朱と漆黒のグラデーションが包み込んで、光球を夜の底に浮遊させる。

あらゆる環境音が一瞬消失した無音の深淵。古いデータが解ける微細な電子音の直後、未だ形を成していない胸の鈴の舌が、金属を擦るようなかすかな震えを生み出した。

次の瞬間、光球は破裂することなく、幾十もの帯状のデータストリームへと解けながら天へと昇っていく。その光の濁流の中から、最も巨大な最初の兵装——黒紫に染まった湾曲する角のシルエットが、強い逆光を浴びてゆっくりと回転しながら出現した。「清濁併せ持つ魔獣の鈴！その音色で狭間に浮かぶ真実を揺らせ!!!」



獣の全身を縛っていた赤いデータ帯が、脱皮するように一斉に剥がれ落ち、暗闇の中に禍々しいシルエットだけが残された。

チリンモンが、鋼の蹄を濡れたアスファルトへと下ろす。

その圧倒的な着地の質量が、路面の水たまりを完全な円形に押し退け、汚水を霧状に四散させた。

漆黒の顔面と四肢、純白の長毛、空を裂く黒紫の角、そして不気味な沈黙を保つ胸の鈴。かつての愛らしい羊の面影は、茜へと向けられたほんの一瞬の、眼差しの奥の柔らかな温度にのみ残されている。

「成熟期!!! 響かせろ! 黄昏を駆ける魔獣!!

チリンモン!!」

自らの存在を世界に刻み込む名乗りと共に、胸の鈴がたった一度だけ、硬質な音を立てた。決して鼓膜を破るような轟音ではない。だが、その微小な波紋が空気を伝った瞬間、落下軌道にあった雨粒が空中で静止し、不規則に弾け飛んだ。周囲を取り囲む半壊したビルの窓ガラスに、蜘蛛の巣状の亀裂が一斉に走る。

対峙する琴音の顔から血の気が失せ、彼女の首に巻き付くシェイドモンの触手が痙攣を起こした。

完全に思考を奪われ、人形と化していた完全体のデジモンたちの巨体でさえ、システム内部に強制的に書き込まれた根源的な恐怖のによって、本能的に硬直する。

茜自身の産毛すら逆立ち、背筋に鋭い氷柱を差し込まれたような悪寒が走った。それは、敵だけに都合よく作用する魔法の音色ではない。

命ある者すべての神経系を冒し、生存本能を直接凍結させる、純粋な恐怖の波動だった。「ひっ…!」

チリンモンの放つ圧倒的な威圧感に、琴音は反射的に後ずさった。

首元に巻き付いていたシェイドモンさえも、未知の恐怖に身を硬くして触手を縮こまらせる。

「な、なにビビってんスカ! たかが成熟期一匹…こっちは完全体がいっぱいいるんスよ! やれッ!!!!!!」

(どういう事ッスカ? シェイちゃんに操られてるデジモンが恐怖に…感情を示すなんて…あの鈴の効果!?)



琴音は自らの震えを誤魔化すように絶叫し、エンジェウーモン、アンドロモン、ブロッサモン、メガドラモンの完全体群に同時攻撃の指示を飛ばした。しかし、チリンモンは力任せに激突をしなかった。

胸の鈴が不規則なリズムで共鳴する。

「フィアーオーソレーション！」

その特殊な音波の振動は、操られた完全体たちの肉体ではなく、シェイドモンが彼らの神経系に食い込ませている影の操作線と、それを統括する琴音の脳内の集中力に直接、強烈な恐怖のバグを流し込んだ。

(そういう事ッスカ!!)

自律的な判断能力を奪われ、単なる傀儡と化していた完全体たちは、命令の伝達系に生じたわずかな遅延を自分で補正することができない。空からの爆撃、地を這う茨、そして聖剣の斬撃のタイミングが、コンマ数秒、致命的にズレた。

チリンモンはその微細な死角の隙間を、雨の壁を裂く神速で駆け抜けた。

黒紫の角が低く唸りを上げる。

「レゾナンスフェラーホーニング!!」

チリンモンが狙ったのは、完全体たちの分厚い装甲でも、デジコアそのものでもない。

シェイドモンの影の触手が彼らの肉体に接続されている、接点だった。

音速のすれ違いざま、湾曲した角の振動刃が、影の操作線を精密に鮮やかに切断していく。

巨体を軋ませていたアンドロモンの機能が停止し、ブロッサモンの茨が萎れ、メガドラモンが制御を失ってビルに激突する。限界まで酷使されていた彼らは、操作を失った反動でデータ粒子となってクロスローダーへと強制送還されていく。

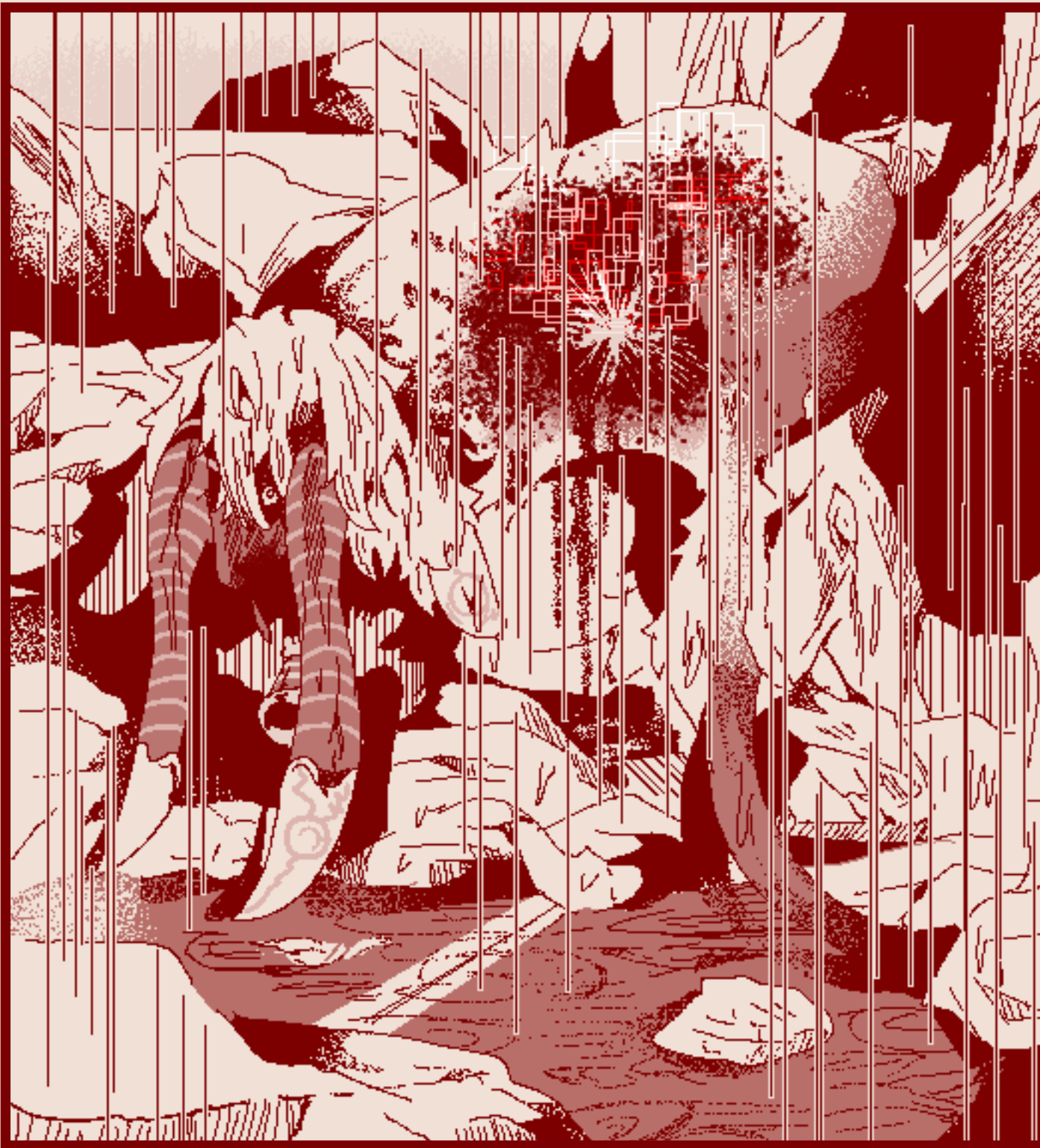
それは、チリンモンが無類のパワーで完全体を蹴散らしたのではない。

恐怖という心理的なデバフによる同期崩壊と、敵の操作構造の弱点を正確に突いた。

直前まで恐怖に涙し、足の震えを止められなかった茜が、これほどまでに冷静で恐ろしい魔獣を従えている。その矛盾が、琴音の理解を完全に超えていた。「なんで…なんで思い通りにならないんスカ！」

琴音の網膜の裏で、勇斗が自分から半歩後ずさった記憶がフラッシュバックする。

茜に負けること…それは相手を支配して得た愛は、永遠に偽物であるという事実を、世界から突きつけられることを意味していた。



「…それだけは、そんなの絶対に認められる訳ないよ!!!!」

狂乱状態に陥った琴音は、クロスローダーから温存していた最後のカード「究極体」を同時に喚び出した。

空を制圧する重火器の獣、メタルガルルモン。

濡れた市街地を水圧で削り取る海竜、プレシオモン。

そして建物を紙のように破碎する巨大昆虫、グランクワガーモン。

いずれもシェイドモンの影の操作線によって自律を奪われ、琴音の無理な同時制御下で苦痛に呻いている個体たちだ。

究極体三体の出現による質量とエネルギーの密度は、成熟期のチリンモンが小手先の戦術で覆せる次元を遥かに超えていた。

チリンモンは霧の残像と鈴の音を使い、グランクワガーモンの突進の軌道をメタルガルルモンのミサイル弾幕へと誘導し、プレシオモンの激流を放置車両の壁で逸らすなど、死に物狂いで攻撃軸をずらし続ける。

だが、レベル差という絶対的な物理法則が牙を剥く。

フィアーオーソレーションの恐怖効果は、究極体の膨大なデータ量によって次第に上書きされ、鈴の音は爆音に掻き消されていく。

グランクワガーモンの大顎を角で受け流そうとしたチリンモンの横腹に、プレシオモンの超高圧の水流と、メタルガルルモンの冷凍弾が同時に直撃した。

チリンモンの魔獣の巨体が、濡れたアスファルトを削りながら吹き飛ばされ、複合ビルの鉄筋コンクリートの壁を三枚連続でぶち抜いて瓦礫の奥へと沈んだ。

「あ…がッ！」

バイタルブレスの同期機能を通じて、チリンモンの肋骨が碎ける激痛が茜の神経系へ逆流する。茜は肺から空気を吐き出し、泥水の中に両手をついて嘔吐した。

「…勝った!!!私の…琴音の、勝ちッス」

荒い息を吐きながら、琴音は歪んだ笑みを浮かべた。

だが、粉塵の立ち込める瓦礫の奥深くから鈴の音が響いた。

血に濡れた鈴の音が、もう一度鳴り響いた。

泥水に這いつくばっていた茜が、口の中に広がる鉄の味を飲み込み、震える膝を叩いて、再びゆっくりと立ち上がる。

彼女たちの瞳から、闘志の炎は微塵も消えていなかった。



茜はパワードスーツの補助を引きずりながら、崩落した瓦礫の奥で倒れているチリンモンの元へ駆け寄った。

バイタルプレス越しに伝わってくるチリンモンの肉体の悲鳴を感じ取りながら、茜はボロボロになった魔獣の黒い顔に頬を寄せた。
「…ごめんね、エレブモン。本当は、私もすごく怖い。痛いし、逃げ出したい。」
茜の目から、初めて恐怖の涙がこぼれ落ちた。

「でも、ここで逃げたら……色井さんや、操られてるデジモンたちや、安藤さんや……いや…日野君が大事にしているこの世界を、誰も救えない。

誰かの心を道具にするだけの…なんて認められない。」

チリンモンは、血を流しながら茜の涙を舐め取った。

「バカね…謝らないでよ…ワタシが選んだんだ…それに茜も分かってるでしょ？

いけるよ…まだ。」

「うん…!」

「…!?そんな…バカな事…!」

二つの魂が一点で完全に同期した。

バイタルプレスの液晶画面に、これまで観測されたことのない、異常な電圧の波形が走った。

その瞬間、空間を隔てる境界線は、世界を両断する極細の金色の雷となった。

極限の恐怖で氷のように冷え切った茜の左腕と、チリンモンの胸の鈴を結ぶ消失点に、純白の光を放つ核が顕現する。

視界を埋め尽くす無数の矩形データ。チリンモンの体組織のパラメーター、茜の血流や神経電位、そして周囲の雨量や路面の電気伝導率に至るまでの情報が、一切の無駄を省いた立体設計図として明滅し、進化核という特異点へ向けて猛烈な速度で吸い込まれていく。

茜の狂った心拍、チリンモンの胸で微かに鳴る鈴の音、そして遠くの黒雲で胎動する雷鳴。

バラバラだった三つの波長が、極限の緊張の中で完全に同調し、重く低い一拍の鼓動へと収束した。

バイタルプレスから漏れる電子音は、機器の許容量を超えて基盤が軋むような、悲鳴に近いノイズへと変質していた。

チリンモンの輪郭が、天から落ちた金色の雷光によって完全に分解される。白黒の体毛、骨格、筋肉が、幾重もの高密度のデータ断層として空中に再構築されていく。

天頂の厚い雨雲を割り、直径数メートルに及ぶ金色の雷柱がチリンモンの黒紫の角へと直撃した。

それは肉体を焼き滅ぼす破壊の雷ではない。成熟期という器の限界を強制的に突破し、より高位の存在へと自らを再設計する。

直撃の余波で、周囲の空間にはガラスが割れるような亀裂が走り、その裂け目の奥から赤黒いデジタルフィールドの深淵が覗く。

肉体の解体は、暴力的に進行した。

胸の鈴が最後の一音を遺し、金属の外殻が同心円状の波紋へと融解する。巨大な角が複数の薄い断層へとスライスされ、高速回転しながら新たに形成された巨大な光球の外周へと退避していく。

純白と漆黒の体毛が一本残らず光の繊維へとほどけ、強靱な獣の筋肉が赤いワイヤーフレームへと還元されていく。最後に、金色のデジコアだけが空間に残り、茜の狂乱する心拍と完全に同じ周期で明滅を繰り返した。

白光を放つ繭の周囲を、DNA 状の巨大な二重螺旋が乱舞する。螺旋の片側には魔獣の生体構造を記述する二進数の回路が、もう片側には茜の体温や血圧、極限の恐怖を刻んだ神経電位の波形が流れる。

二つの情報が絡み合う結節点だけが金色に爆ぜ、完全体の新たな骨格データへと翻訳されていく。

繭の内部で、金色の核を中心に、巨大な背骨、分厚い胸郭、そして大地を粉碎する四肢の骨格線が次々と点灯していく。さらに尾の付け根からは、三本の空洞の槍形データが伸長し、来たるべきプラズマの奔流を受け入れるための器として形を成していった。

だが、その途方もない情報量の処理と再構築の負荷は、接続されたタイマーの脆弱な肉体へと容赦なく逆流した。茜は頭蓋骨を内側から万力で締め上げられるような激痛に顔を歪める。鼻の奥底に、ねっとりとした血の鉄錆の匂いがこびりつき、細胞の一個一個が悲鳴を上げていた。

「チリンモン、超進化！」

古い器を脱ぎ捨て、光球の中心から響き渡ったその意志の声は、もはや恐怖を撒き散らす魔獣のものではなく、天を焦がす雷神の胎動そのものだった。



金色の雷が背骨と四肢を奔り、魔獣の尾は、純粋なプラズマで構成された三本の巨大な雷槍へと分かれていく。

純白の繭を内側から食い破るように、金色の神経光が巨大な背骨と胸郭を駆け抜けた。

漆黒の筋肉層が鋼のケーブルのように何重にも巻き付き、その上を覆うように、周囲の熱を奪うほどの冷気を孕んだ白と黒の長毛が爆発的に伸長する。

「雷鳴そのものを冠する獣の王！我の前に立ちふさがる傲慢なる輩を粉碎しろ!!」

チリンモンのそれを遙かに凌駕する太さと質量を持った黒紫の角が、莫大な雷の流路を刻み込んで湾曲し、額へと定着する。前髪の隙間から覗く金色の片瞳は、敵を射抜く殺意に満ちている。関節と鋼の蹄には、超高高度からの落下衝撃にも耐え得る重厚な金属質のデータ装甲が結合され、着地の絶対的な重量感を保証した。

胸の奥深くへ融合した鈴の名残は、もはや音を鳴らすためではなく、空間そのものを震わせる雷鳴核として低い地鳴りを響かせ始める。

そして、展開された三本の尾の器に、臨界点に達した高密度のプラズマが注入された。空を切り裂き、大地を焦がす三本の雷槍。

「その名を千里を超え轟かせろ！

完全体!!!グラフモン!!!!!!」

繭の残滓を四方へ弾き飛ばし、完全体・グラフモンが雨の新宿へとその巨体を顕現させた。

鋼の四肢が濡れたアスファルトに下ろされた瞬間、着地した一点から、金色の放電現象が樹木の根のように、あるいは毛細血管のように四方八方へと這い広がった。それは無差別に周囲を破壊する暴走ではない。

水たまり、放置された車両の金属フレーム、切断されて垂れ下がる送電線、そして琴音のシェイドモンが究極体たちへと這わせている影の操作線。

それらすべてを瞬時にマッピングし、電流の経路を演算しスキャンする。

背後で三本の雷尾が扇状に展開され、角と胸の雷鳴核が同時に臨界の輝きを放った瞬間、大気を物理的に震わせる咆哮が轟いた。

「グラフモン!!!!!!」

千里先まで届くと言われる伝承通りの圧倒的な雷鳴が、ビルの谷間に反響し、究極体たちの質量によって歪められていた戦場の空気を強引に自らの領域へと書き換えた。だが、その偉容の代償は残酷なまでに十二歳の少女の肉体を苛んだ。

「……っ、ぐ!？」

グラフモンの着地と同時に、過剰な同期による衝撃が茜の神経系を直接殴りつけた。

視界がハレーションを起こしたように真っ白に飛び、茜の鼻筋をツーッと熱い鮮血が伝い落ちる。

膝の関節が完全に支持力を失い、汚水に塗れた路面へと崩れ落ちそうになった。



グラフモンは、琴音とシェイドモンが複数の究極体へ無理やり伸ばしている影の操作線を降り注ぐ雨。水膜で繋がった路面、放置された車両のフレーム、そして切断されて垂れ下がった高圧電線。グラフモンはそれらすべてを、一つの巨大な電気回路として演算した。

グラフモンの咆哮と共に、上空の黒雲から数万ボルトの落雷が都道へ叩きつけられる。金色の電流は水たまりを高速で走り抜け、究極体たちの装甲を焼くよりも早く、彼らの足元の影から伸びるシェイドモンの操作線へと直接逆流した。

チリンモンとの攻防で既に限界を迎えていた三体の究極体は、脳髄の奥底に雷撃を流し込まれたことで、完全に制御不能のショート状態に陥る。

その硬直の一瞬。グラフモンは前脚の筋肉へ雷の運動エネルギーを集中させる「スウンランスニョルニル!!!」

音速の踏み込みから放たれた角の一撃が、正面のプレシオモンの巨体を貫き粉碎し、空高く跳ね上げた。

「スウンランスグングニル!!!」

さらに、その慣性を殺さずに身体を独楽のように捻り、雷で構成された三本の尾槍を別々のベクトルへ伸長させる。槍は、制御を失って身悶えするメタルガルルモンとグランクワガーモンを、正確に貫き通し、雷鳴と共に内部から電撃を発生させ完全に粉碎した。

落雷一つの閃きの間に、三体の究極体が同時に消し飛んだように見えた。

「…はあっ、はあっ…。」

茜の肩が激しく上下している。パイタルブレスの画面は赤く染まり、アラートが鳴り止まない。

琴音は、茜の鼻血とふらつく足取りから、急激な連続進化が彼女の生命力そのものを削り取っていることを見抜いた。

「…無駄ッスよ！そのまま続けたら、あんたの頭の血管が破裂して壊れるッスよ！」

琴音の叫びには、戦意を折ろうとする悪意と同時に、本物の恐れが混じっていた。

自分と違う生き方を選んだ人間が、その意志を貫くために死んでいく姿を、琴音は直視したくなかったのだ。

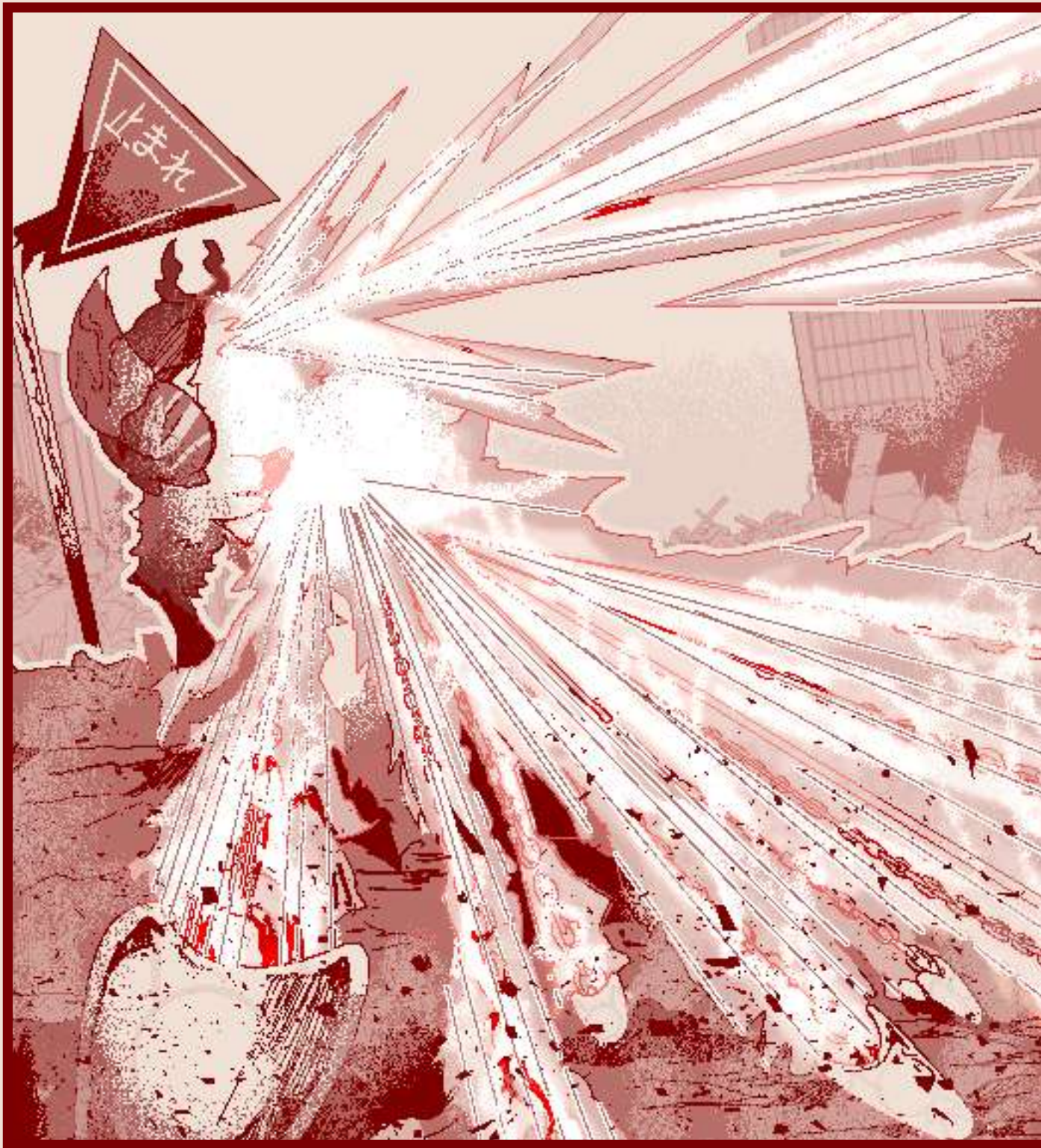
「…！なんなんッスカ…!!!??なんでそんな目で琴音を見るんッスカ!!!??」

ふざけるな!!! 琴音の愛の方が正しいって証明するッス!!!!!!」

琴音は絶叫と共に、クロスローダーの全てのエネルギーと、自身に蓄積した執着のすべてをシェイドモンへと注ぎ込んだ。

シェイドモンの薄っぺらい影の身体が、周囲のビルやアスファルトに落ちたすべての影をブラックホールのように呑み込み、急激に膨張していく。

顕現したのは、巨大な暗黒の竜ニーズヘッグモンだった。



狭い新宿の街路には収まりきらず、ビルの外壁に無数の爪と胴体を食い込ませながら、霧の天井からグラフモンめがけて襲いかかる。

グラフモンが迎撃のために雷を纏おうとした瞬間。

「っ…!」

茜の膝が完全に崩れ、地面に手をついた。タイマーの意識の途切れにより、グラフモンの金色の雷がフッと掻き消える。

茜の脳裏に、勇太の横顔が浮かんだ。彼が迷い、間違えることを恐れながらも、それでも他者の痛みから目を逸らさずに選び取ってきた姿。

自分が立ち上がるのは、勇太に好かれるためじゃない。

…勇太すら関係ない自分が選んだ選択を証明するために。

「グラフモン!!!!」

「ああ!!!」

泥に塗れた手を握り締め、茜は血の混じった咆哮を上げた。

グラフモンが呼応して雷神の威容を取り戻し、暗黒の巨竜と真っ向から激突する。

最初の激突は、純粋な質量の暴力により蹂躪された。

ニーズヘッグモンの暗黒の巨体が、グラフモンの金色の雷ごと呑み込み、地面の根元まで凄まじい勢いで押し込んだ。

メキメキと鉄骨が拉げ、グラフモンの雷光が完全に消え失せる。

「…琴音の、勝ちっス」

瓦礫の山を見下ろし、琴音は安堵の息を吐き出した。

だが、グラフモンはただ力比べで押し負けていたわけではなかった。

激突の最中、彼女は無数の雷の尾槍アンカーとし、それぞれ別の場所—水膜の張った道路、露出したビルの鉄骨、そしてニーズヘッグモン自身が這わせている巨大な影の中心へと、深く打ち込んでいたのだ。

溢れ出て今にも爆発して突進しそうなエンジンとなった雷となったエネルギーをアンカーとして打ち込んでいた。



「これが最後の勝負たい！」

アンカーを外し抑え込まれたエネルギーが解放される。

グラフモンは瓦礫を蹴り碎き、最後の余力すべてを角へ込める。

「[スウンランスニョルニル!!!!!!]」

音速の突撃が、雷光に縫い止められた影の核を正確に貫く。

数秒遅れて、新宿の街全体を揺るがす特大の雷鳴が轟いた。ニーズヘッグモンの巨体が内部から弾け飛び、無数の暗黒の破片となって四散する。

シェイドモンは核を碎かれたことで進化を維持できなくなり、傷ついた幼い影の姿へと退化して、琴音の足元へ力なくポトリと落ちた。

シェイドモンは声も出せないほど弱り切りながらも、ズルズルと身体を引きずって琴音の足首へすり寄ろうとする。

ニーズヘッグモン崩壊の衝撃波が周囲を吹き飛ばし、琴音の身体も紙屑のように舞い上がった。

ビルのコンクリート壁に後頭部と背中を強く打ち付けられ、琴音は力なく濡れた路面へと崩れ落ちる。クロスローダーは手からすっぽ抜け、カラカラと音を立てて遠くへ転がっていった。

グラフモンの金色の雷が急速に収縮し、限界を超えた茜の身体も糸の切れた操り人形のように揺らいだ。

戦闘の余波で、琴音がもたれかかっているビルの外壁から、巨大なコンクリートの塊と金属製の看板がメキメキと音を立てて剥がれ落ち始めた。

「あ…。」

琴音は痛みに身体が動かず、ただ落ちてくる死の質量を見上げることしかできない。

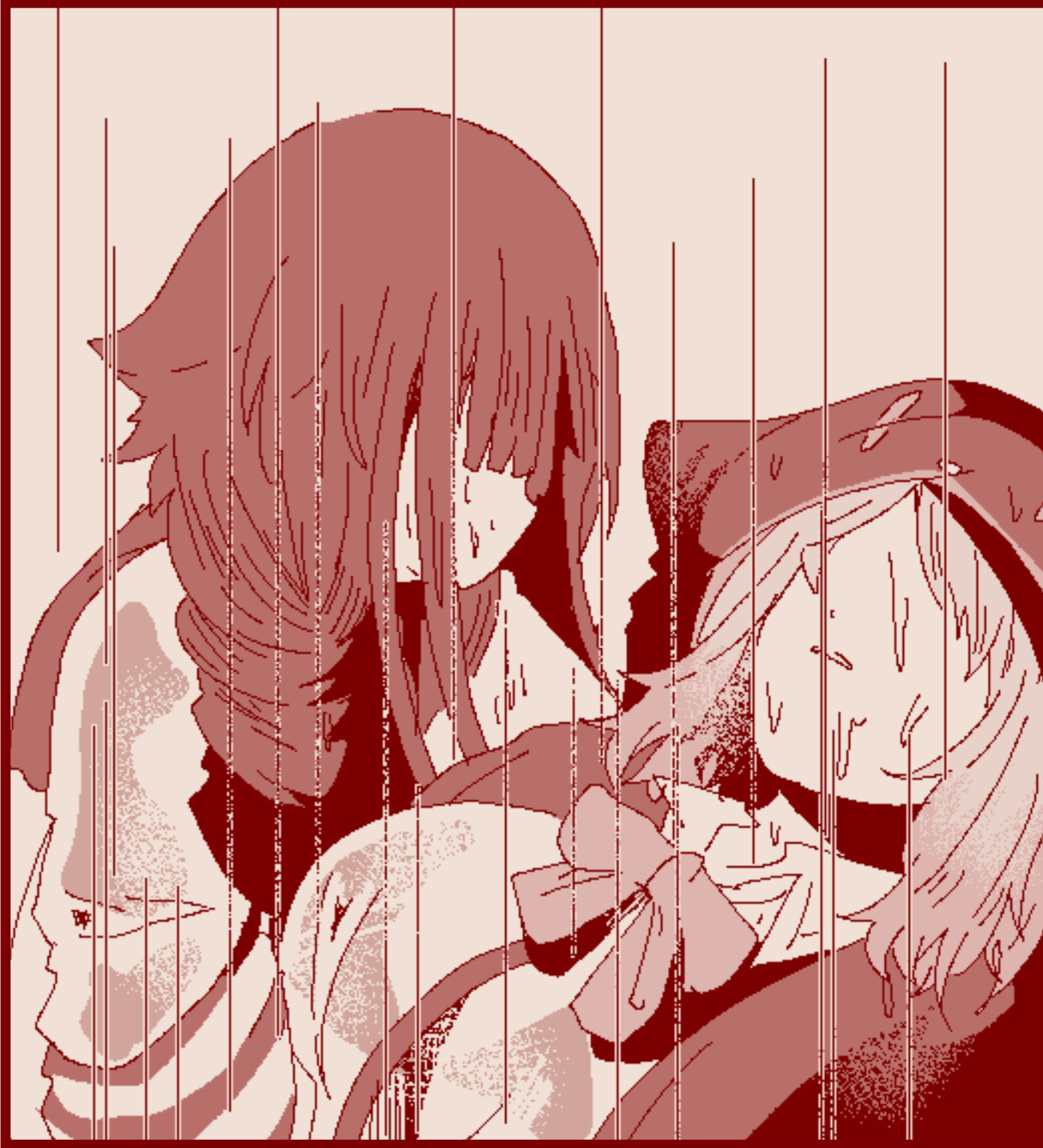
次の瞬間、茜の身体が反射的に動いていた。

パワードスーツの残存バッテリーをすべて脚部のスラスターへ回し、琴音へ向けて全力で飛び込む。

琴音の身体を車道側へ突き飛ばし、そのまま自分の身体を覆い被せるようにして盾になった。

グラフモンも残る三本の雷尾を大黒柱のように差し入れ、落下してくる巨大な瓦礫の直撃を一瞬だけ支えて軌道を逸らす。

茜の肩や背中に、細かいコンクリートの破片がバラバラと降り注いだが、致命傷となる直撃は完全に防がれた。



「な、何で…。」

琴音は、自分を殺そうとしていた敵に命を救われた事実が理解できず、呆然と茜の血だらけの顔を見つめた。

「何で、琴音まで助けるんスカ…。茜ちゃんにとって、琴音は邪魔な敵だったはずじゃないスカ…。!」

茜は肩で激しく息をしながら、痛みと疲労で今にも泣き出しそうな顔のまま、琴音を真っ直ぐに見据えて言った。

鼻血で汚れ、泥だらけの顔で、茜は振り絞るように言葉を紡ぐ。

「…別に、死ぬ事なんてないと思っただけです。」

安藤さんが言った通り…私そんない子じゃありませんし…気持ちだって痛い程分かりますし…。」

琴音の瞳から、ボロボロと大粒の涙が溢れ出した。

「でも…琴音には、もう何もないッス…。」

負けた自分には勇斗も失ったら…生きている価値なんて…。」

茜は説教をするつもりもなかった。

「それでも…全部終わらせるには…きっと足りない気がするんです。」

ただ、濡れた路面に転がっていた琴音のクロスローダーを拾い上げ、彼女の精神支配の手段を物理的に断った。

琴音は路面に顔を伏せ、声を上げて泣きじゃくった。

戦闘で負けたから自分の愛が偽物になったのではない。

太田 勇斗の自由意志を奪い、彼に琴音を選ばないという選択肢を許さなかったその瞬間から、自分の愛は最初から破綻していたのだ。

その絶対的な孤独と罪の意識を、彼女は初めて自分の内側で直視した。

少し離れた場所では、シェイドモンの操作線が切断されたことで太田 勇斗が倒れていたが、長期間の精神支配と連戦によるデータ干渉によって、彼は深い昏睡状態のままであり、目を覚ます気配はない。

そこへ、パワードスーツの装甲をボロボロに碎かれた色井 恋夜が、レップモンとディアトリモンに肩を貸してもらいながら這うようにして戻ってきた。

恋夜は、倒れて泣いている琴音に報復の拳を振り上げるような真似はしなかった。まず勇斗の瞳孔と呼吸を確認し、次いで琴音と茜の負傷の度合いをチェックする。

そして、茜が確保したクロスローダーを危険物として嚴重に回収し、琴音を治療と拘束の両方の対象として保護する手続きを取った。

グラフモンの巨体が淡い光の粒子となって分解され、フラフラと覚束ない足取りのエレプモンへと退化する。

茜も膝から崩れ落ちそうになりながら、小さなエレプモンの身体を抱き留めた。

勝ったという達成感などない。ただ、全身の骨が軋むような疲労感の中で、互いの体温がまだここにあることだけを、二人は無言で確かめ合っていた。



濃霧と硝煙に包まれた都道 430 号。

マッハモンの排気音が爆音を轟かせ、破壊されたアスファルト、横転した車両、死体やガラスの破片が散乱する悪路を、新宿駅方面から都庁へ向けて狂ったような速度で突進していた。

「そういえば…慎平さんどうして、ここに？」

風切り音とエンジン音に掻き消されそうになる声で、勇太が背後の慎平へ尋ねた。慎平は、勇太の血で自分のジャージが赤く染まっていく感触に胃の腑を冷やしながら、息継ぎの間に短く答える。

「…デジタルワールドで別れた後、俺たちは現実世界に弾き出されたんだよ。

しかもこいつら付きで。

そしたら、お前が SNS で新宿とかデジモンとか馬鹿正直に書き込んでるのを見つけてな。

連絡取ろうとしたらアカ消してるしよ…しゃあねえけど来たんだよ。」

「はは…すみません。」

「どっちかっていうとおめえのネットリテラシーのが言いたい事あるけどな。」

「いや必死だったっていうか…。」

慎平は視線を勇太から逸らし、霧の向こうの景色を睨みながら続けた。

「日本を囲んでるあの気色悪い結晶の壁…外から入る分には素通りできたが、入った瞬間に二度と出られなくなった。

セラフィモンの罠だか何だか知らねえが、通信じゃあ悪魔が虐殺してるだのリングがどうのだの、おっかねえニュースばかり流れててよ…。」

慎平は、不自然に口角を歪めて、自分自身を嘲笑うように言った。

「本当は、怖くなったんだ。

俺なんか首を突っ込む話じゃない、もっと強いやつに任せて、安所って奴から押し付けられた遭難デジモンたちを守るために、引き返して隠れてるべきだって…何度も、逃げる理由ばかり探してた。」

自分がどれほど卑小で、土壇場で逃げ出そうとした人間であるかを、自傷するように白状した。

「笑うか？」

だが、勇太は慎平のその言葉を否定しなかった。

右腕の痛みをしかめながら、それでも少しだけ安堵したような声で答える。

「まさか…逃げたかったのに、怖かったのに、それでも来てくれたんですね。

俺の知ってる慎平さんですよ。

さっきみたいな恰好付けてる慎平さんの方が似合わないですよ。」

「…帰ろうかな。」

「あっ!? 照れてるか知りませんが何言ってるんですか! 意地でも行ってもらいますからね!」

「あだだだ! 口引っ張んな!!! ていうか意外と元気だなおめえ!!!」

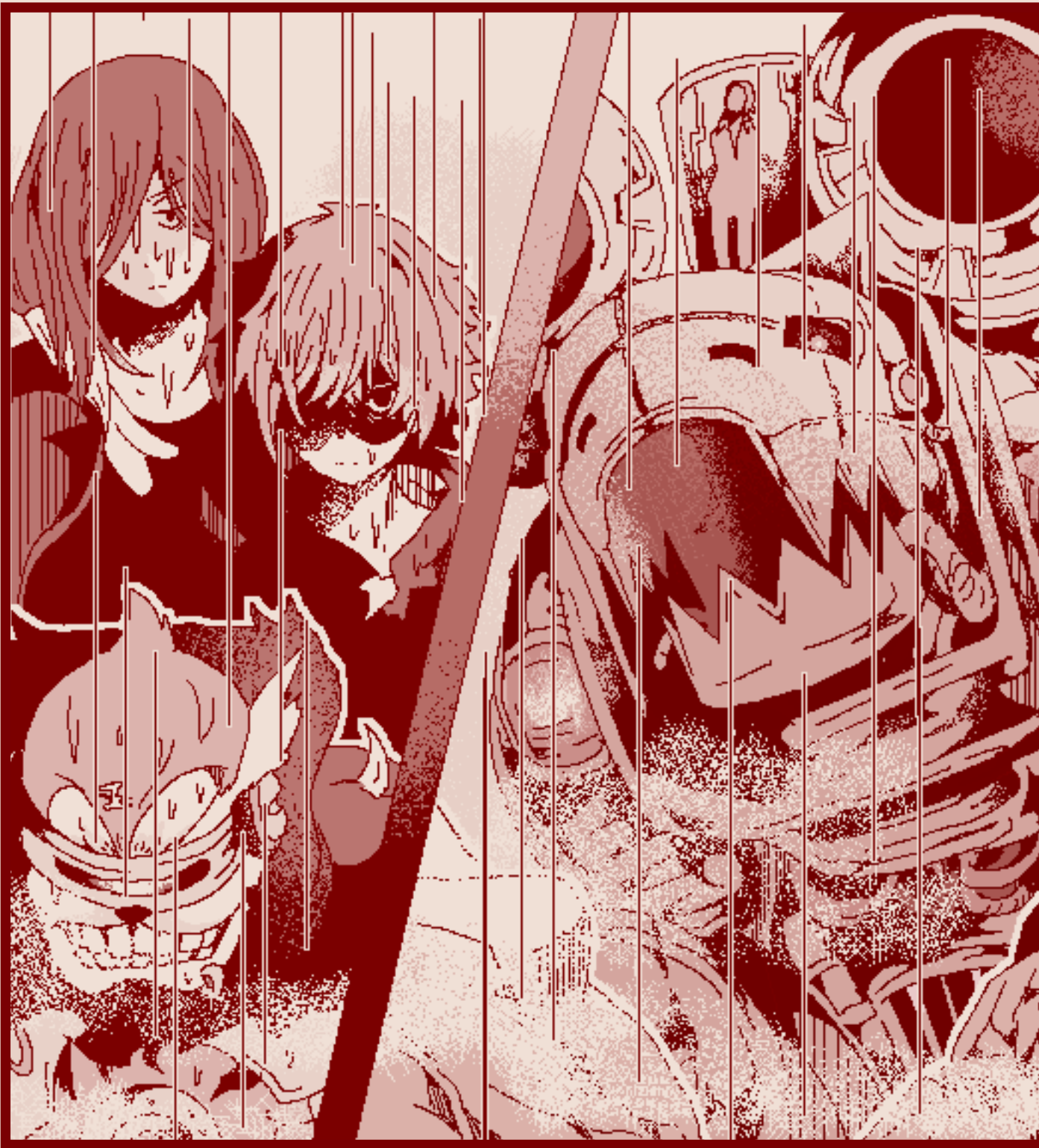
その照れ隠しと焦燥感をすべてマッハモンへの怒声へとすり替える。

「マッハモン! もっと速度出せッ! ちんたら走ってんじゃねえ!」

「うるせえ無茶言うな! 舌噛んで死ぬぞ!」

マッハモンが怒鳴り返しながらも、タイヤを焼き焦がす勢いでスロットルを開放する。

乱暴なやり取りの中で、勇太の口元に微かな笑みが浮かぶ。だが、止血材を巻いた右腕からは再び止めどなく鮮血が滲み出していた。



都庁へ近づくにつれ、轟音と共に都庁が崩れる中から響いていた異音が、明確な輪郭を持ち始めた。

それは、ゲートが崩壊する際の空間の歪み音でもなければ、セラフィモンの巨大な羽音でもない。

数千トンもの質量を持つ巨大な機械の脚が、コンクリートの都市を踏み潰しながら歩行する絶望的な重低音だった。

濃霧の奥から、まず一本の太い赤い走査光が、探照灯のように舐めるように横切った。次いで、高層ビルの窓ガラスの反射に、無数の砲門と剥き出しの金属装甲のシルエットが、巨大な影となって映り込む。

一歩踏み出すごとに都道が陥没し、地下の配水管が破裂して水柱と蒸気が噴き上がる。「…!止まれマッハモン!」

慎平の叫びと共にマッハモンが急ブレーキをかけ、タイヤを軋ませながら濡れたアスファルトを数十メートルにわたって滑り、横滑りするように停止した。

慣性の法則で勇太の右腕に激痛が走り、慎平が慌ててその身体を後ろから抱き留める。二人が顔を上げた時。

都庁周辺を覆っていた濃霧が、巨大な排熱機構から噴き出される突風によって一気に吹き飛ばされた。

そこに姿を現したのは、全身の装甲をより凶悪な兵器群へと換装・修復されたムゲンドラモンだった。

そして、そのムゲンドラモンの肩部、巨大な砲塔の基部に近い装甲の上に、一人の男が立っていた。

全身の皮膚を焼けたれさせ、人ならざる執念だけで肉体をつなぎ止めているような姿。渡辺直人だった。彼が光との決戦の瓦礫の中から生き延びた亡者。

直人は、慎平を一瞥することすらしなかった。

「日野 勇太ああああああああ!!!!!!」

ムゲンドラモンの頭部センサーが低く駆動音を鳴らし、赤い眼の走査光が収束して、マッハモンの背に乗る勇太の小さな身体を排除すべき標的として完全にロックオンする。

勇太は重傷を負い、ヴォーボモンとも未だ再会できていない。

慎平のクロスローダーによる戦力を含めても、正面からムゲンドラモンを突破できるような絶望的な戦力差ではない。

照準の固定を知らせる無機質な電子音と、重い砲門の旋回音。

そして、勇太は浅い呼吸を整え、静かにマッハモンから降り静かにデジヴァイスを構えフェアリモンの脚を展開した。

慎平とターゲットモンも降りクロスローダーを構えた。

雨の新宿に冷たく響き渡った